

平成6年³月⁸~~11~~日発行

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆう と 櫻貝 と
海光る わが 故里

第 70 号

内容	鵠生園日記（続）	田中 まさ子
	関根佐一郎氏宅を訪ねて	川島 孝子
	湘南中学（旧制）から高校へ	吉田 興一

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保2年・1801）で、“くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。

鵠生園日記

田 中 まさ子

平成五年 年の初め、部屋から 初日の出を見る、静かな、おだやかな朝、あゝ
平和でよかった。 平和より 祈ることなし
瀬戸内寂聴さんの言葉を読む。

「日本が金持だというのが、ちがう日本は、ここ二三十年『軍備』をしてなかったから、お金が残ったのだ、いくら働いても、そんなに残るものではない」と、
バブルとは消えてゆく金なのか、政治の不信感を思う。

ソマリアは無政府状態と言う

1月14日

歌会始め、

米英仏軍イラク空爆、ミサイル配備制裁、イラク譲歩 示す

東日本 十一年ぶりに地震、釧路、八戸 震度6、

このところ体調をこわして床にいた、

若月先生に安藤先生の死を電話で聞いて、驚く、百才とはいえ まだまだ お元
気で短歌をなさって居られるものと考えていた。

私が安藤先生、についたのは、鵠沼公民館で教えて頂いた、永い年月だった。

感無量、つたない歌を「心の花」に出させて頂いた その御恩は 一生忘れられ
ないものである。

1月23日

初めて聞く「エイズ」という言葉、何だか 解らないが、どお 対応をしてゆか
なければならないのか本当に解らない。

憲法九条、戦争放棄、老人問題、デイサービスと厚生省などの論議など園に
集る人々と話す、

身辺の問題を老人といえど知らねばならない。

2月

何んとなく 落ち着かぬことが出初めた。

世の中 さわがしくなる

護憲、改憲論、

歌を通して色々よいお話しが出来た 岩田さん しばらく園へ見えられないと思
っていたら、肺ガンのため、十六日の朝 亡くなられた、よい人だった とおしま

2月（つづき）

れてならない。

永い人生に、別れを幾度も重ねて来た、

今一人残り、言い残したいことを、書き残しておく、たどたどながら、みなさまのおかげで、自分の生を充実させて、これからも生きてゆけたら幸せと思う。

4月9日

カンボジアで、国連ボランティア、中田厚仁さん二十五才が射殺された。

カンボジア平和維持のために、お国のためにと言われる御両親の言葉、切つなく、涙が出る。

5月

主人の 十七回忌に尼寺さんに来て頂き法要をすませた。 長い間そのままになっていた主人の書斎を取こわすことにした。

主人は晩学の哀しさを読書に集中してくらした人で、おびたゞしい蔵書で二階も下もうずまって、二階は落ちんばかりだった。

どこから 手をつけていゝか と考えるばかり、この時長い間のつき合島津さんに相談をした。 図書館で資料として 役立てゝ頂くことになり、島津さんのおかげで三ヶ月の月日を重ね片付けが終り、戦前戦後と住んだ古い家はあとかたなく取はられた。

老いてのこの整理は切つなくつらいものだった。

6月9日

皇太子さまと小和田雅子さまのご結婚式が宮中三殿賢所で行はれた。

源氏絵巻を見るようで本当によかった。

日本国民は みな 喜びの声を上げた。

6月19日

昨夜から余さずテレビを見て、おどろきを感じず、日本は平和を愛して、もっと静かにくらしえないものか

内閣不信任を可決、衆院解散

首相は方針を固める

政治改革 マスコミは漠然と批判

自民分裂、総選挙、

色々な出来ごとが新聞に出て、頭で整理出来ない、まづ書いておく、

6月23日

政権、離合集散、新党旋風、
ゆれる経団連、どうなるのか、自民党
新生党結成、さきがけ党、新党羽田グループ

7月1日

夏なのに寒く綿入れを着て部屋を片付け 天気定まらないで 取こわした家の整理が長びく 本当に変な夏で海岸も海もさびしい。

都議戦選挙 初まる、
色々政界は大変で、国民も落ち着かない、
総選挙スタート、自民継続か非自民連立か

7月17日

北海道の豪雨、洪水、津波 と本当にいたましいことが起きて テレビで見る無残さにどうして上げようもない心が痛む

7月26日

この頃 余り眠れず、ついテレビを見て了う、
非自民連立政権確定になる、
七党が政策を詰める。

7月29日

細川さん首相になり 国民によく解る政治をするという、
非自民八党が合意

8月4日

政権交代で三十八年間の歴史を閉じた 憲政史上初の女性衆院議長が出来た
土井たか子氏 受諾す、

8月5日

三十八年自民政権に幕が下り、細川氏が首相に指名されました。
宮沢内閣総辞職 新党旋風が起り、
時の流れはあれよあれよと止まらないまゝ 私達国民は見つゞけるより他ないのでですね

鶴沼の方言で言へば、まったく

「ごちょ切る」よと 実際言いたくなりますが この「五腸切る」という方言を
会員のみなさまは御存じでしたら説明して下さいませんか 困った時に用うよう
ですが、

8月6日

忘れられない、原爆の日 四十八年立って 又新しい涙で黙禱をささげました。

今年の夏は寒く早立秋となりました。

会員みなさま、体調はいかがですか、私も今年は、鵠生園日記にことよせて、鵠沼の移り変りを書いておきたいと考えて居りましたが、いつまで立っても書けません。

先ずびっくりだらけで日本も、世界の国々も毎日のように新聞もテレビも報じますが どのようにして理解して行ったらよいか、全然解らない、(エイズ)騒動が急に色々な話に出てくる、若い命を失うのは 戦争ばかりではなく 若い命が治らない病気で失はれるのだとのこと、私は夢中でテレビを見ました。

この時若い女の先生が、中学生に教えるのを見て、学問の中に入入れた、その勇氣、又その学ばせ方の(いやらしくない)のに本当に感心しました。知らなければならぬことだらけで 晩学の私は戸まどいます。

私ごとですみませんが、今年二月から七月までの間に、亡き主人と共に五十年暮した古い書庫を解体しました。二階の上下にぎっしりつまれた古い本の整理はいつかしなければならぬと今日までになって了い老の身には重苦しいものでした。幸い長い年月本のことでお世話になった、図書館の島津さんに大変お世話をおかけしてしまいました、島津さんは お休みの日も宅へ来て下さって 資料としてお役に立つものは、お役に立てゝ下さり、亡き主人のために有難いことで、鵠沼の図書館ならではのこと、ここに御礼を申し上げます。

又家にあった古いものは 市の博物館でお役に立てゝ下さり 民族学の亡き丸山先生も喜んで下さることです。

人は育った時代、環境で考え方がちがうのは仕方ないことです

戦後生れは、平和も、民主主義も、あたり前と思っているのでせう

8月7日

又鹿児島に豪雨で被害は広がる。

死者、不明 百人を超すとのこと

異常な現象が起きて いたましいことが度々起きて、どうしたことだろう。

この年の天候の不順さ、いつ春が去り夏が去ったのか定かでなく、立秋となる。

8月10日

細川総理と内閣記者との初会見で、先の大戦は侵略戦争であったと 言はれた。私は何んとも言えない涙を止めることが出来なかった。

8月15日

終戦記念日、毎年来るこの日は生き続けている限り涙はつきない、もっと早く終つたらと 多くの涙を流す人は つきない思ひだろう。

平和国家という有難さをしみじみ感謝する、決して過去の出来ごとではない。

太平洋戦争をテレビで見て又涙を流した。一億玉砕、三年八ヵ月で二百八〇万人の死者が出、日本民族はどうなるのか、とみな思った。

今 侵略戦争、謝罪、反省 と言はれるが、何も知らせられなかったのに。

盆の送り日の日、漸く蜩の鳴く音を聞く もう過ぎたこと、過ぎたことと聞える。

9月1日

園では、防災訓練をする、日常のこと、地震に出合った時のこと、話し合う、みな熱心に聞く みな不自由な日常の中で 自分自身を守らなければならないからだ

先月から準備が出来て、水曜日のデイサービスの中でお琴教室が開かれた。

先生はボランティアの畑中さん、私が故里を出てから何年もお琴を弾くことがなかったので嬉しく参加させてもらった。

手指のリハビリにもなって楽しく水曜日を待って先生の親切なことに甘えて、指を動かすだけ、覚えられるには頭はついてゆけないが、まあこれも仕方ない。

9月4日

先月 八月の終りに、新内の「岡本文弥」の声を聞く 百才の声のツヤに 感ゲキ、していたら 清元志津太夫「九十六才」の「梅の春」「神田祭り」を聞いておどろく。

9月25日

景気は底割れ、コメ緊急輸入、

来年の夏「みなとみらい」21地区で開かれる、第十四回、国際「エイズ」会議のこと 市民は理解をとのことなど 新聞に出る、「エイズ」解らないが、知らねばならないことだと思う。

鶴沼の広田弘毅さんの家の前を車で通った。門は いつも閉ざされている。歴史の中の人に住んでいた家を見て 色々の歴史がまだまだ解っていないのに 寂しさを感じた。

10月11日

米大変な凶作のこと「ホスピス」ケアのこと

ロシアエリツイン大統領来日、シベリア抑留者のことなど 園の人達が 話題をよぶ。

10月11日(つづき)

価値観の多様化による色々な考へ方があるが 新聞でよく(声)のらんを読む、本当に、そうだなあと、共感出来る記事にあうと嬉しい。

「金丸五億で初まった」色々なこと、世はさわがしいが、ずっと見ているだけだ

10月20日

園でテレビを ひる食後に見ていたら、

皇后さまが 体調をくずされたとのことみんなびつくりした。すぐその後 意識がもどられたとあり、又お言葉が出ないとのことに、園の人々はみな心から、言った。

「おかあい相な 皇后さま」と 不自由な口で 身体一ぱいに言った。私はその同じ不自由さのある人達の心の有難さ心から嬉しく思った。早く治って下さるといふ。

この年しは惜しい人を何人もおくり淋しくてならない。

笠 知衆さん、村瀬 幸子さん、山本 安英さん

みな 地味な芝居の中で せい一ぱい共感を味はせてくれた得難いおいしい人ばかりだ

杉山 寧さんの日本画は文春の表紙でなじみぶかいものだった。 戦前戦後、よい歌声を聞かせて、みな まずしさの中に 豊かな幸せを感じ生きてきた、歌手 藤山一郎さん、又お正月には 紅白のステージで会えると思っていたが

なつかしい人 忘れ難い人々は、あっさり逝っていった。

この年の秋は、コメ大凶作で、米どろ坊が出た。又いやな時代のことを思い出した。

心温まる話しはないものか、と新聞テレビを見る、知ることは大切だと思う。

11月3日

園では今年も又文化祭をした 職員さん 大御苦労さま

おぼつかない手で一生懸命に作った作品を 出品して見てもらった。

これが、聴覚障害を持ったり、足手その他の障害の中で作った作品、やれば出来るものだと感心してしまう。

11月7日

今年の冬は暖冬ということだ。

皇后さま お出かけになれる。よかった。

さて細川首相、は韓国を訪門して、金泳三大統領と会談された。

その際、日本がした植民地支配を陳謝して加害者としての日本を正した。

日韓首脳はアジア太平洋時代への協力を新しく確認し合った。

「陳謝」その言葉に韓国は、よい評価をしたようだ。これはよかった。

北朝鮮の核は 疑いはないだろうか。

鶴沼出身の細川夫人、佳代子さんは、とても明るく、エクボが可愛らしいと園では話す、佳代子さんは、途上国の子供救済で国際貢献に「ワクチン」募金に活動するとのこと よき首相の道連れとなってほしい。

11月23日

この頃から漸く秋らしくなり、気象も落ち着いてきて、久しぶりに 江ノ島 の海の上に、雪を頂いた富士山が見られる日がつまいた。いつ見ても変らぬ海と美しい富士山、だが この海のまわりは 大変な変わりようで、蒼い波も白い砂浜も、まるで見えない場所も出来て、あの 波や砂浜は どこへ行ってしまったやら、少し松はまだ残ってはいるが、若い頃から見続けた、湘南の海のなつかしさを語る人はだんだん少なくなった。

この年の春頃から、鶴生園へ江ノ島の人達が 三四人ばかり入られた。

江ノ島に永く住み付き、島中 親類のようなつき合で 古い島の話しを聞せてくれる。とても気のよい にぎやかな人達だ、いつも楽しみで 園へ来る日が待遠しいという。

今年もおしつまり 去年のクリスマスのことや 新しい春のことなど 話題にのぼる。

去年のクリスマスには 職員さん みな張り切って、白雪姫を上手に演じて下さった。

今年は「白波五人男」を 私達で演じて見ようかと 江ノ島組 が言い出す、そりやいゝよと みな喜んで さん成した

さあ それから 食後の休みの間に、五人男の「ツラネ」のセリフを 思い出して言い合う。「岩本院の稚児上り ……………」と ごきげんで(セリフ)を言う、よく覚えているものだ。

さて後見(黒衣)をだれにしようかと。色々考えたが、この役は職員の吉岡さんに限ると思う、あの気のいい親切な吉岡さんはきっと一生懸命になって、(小道具)も傘五本と衣装をととのえて 木を打ってくれるだろう 花道に出たら、上手に、木を打ってくれるよ、とてもよい役だからと吉岡さんに言へばよい。

11月23日(つづき)

とにかく、(ツラネ)のセリフを覚えなければと一生懸命なのはよいが、一寸困ったことには 配役がきまらない、みな 弁天小僧をやりたいという。弁天小僧は 一人だけあればよいのに 三人も四人も他の役があるのに、この配役が決まりそうもない。

日がせまるし、だんだん寒くなり腰が痛くて、どうも 見得が切れないから と言い出してきた、仕方がない、みな同じどろ坊なら、江ノ島の弁天小僧の方がいいのだと言うので、

止めることにしようと、あっさり止めることになった。

先ず 健康と和 が大事だから

12月

十二月 師走という月になって、世間はあわただしいが 園に集った人達は、ゆったりと かまえて見ている

色々なことがあったが、今更という気持が強い、戦前戦後の「修羅」をくぐって来たせいだろう

来る 新しい春も 健康と和 を保ってゆきたいものである。

鵠生園日記終わり

関根佐一郎氏宅を訪ねて

川島孝子

八月十日、公民館祭の展示予定である、「鵠沼村の歴史と暮らし」の一環として、有田さんの御親戚で、由緒ある、築後百余年を経たという関根氏宅で、昔の鵠沼村の農業、漁業、酪農（とまではいかないが、各家庭が乳牛を飼育していた。）について語っていただく。一行は、有田さん、佐藤さん、橋本さん、川島の四名である。主として有田さん、佐藤さんの微に入り細に入った質問に答えられ



る形で二時間余を過ごした。

雨乞いの竜を作り終わって

高額納税者のみに許可された九つの網元の話、虫送り、雨乞いの行事に関する話、野菜果実についての話し。明治から大正、昭和初頭にかけての村の生活が彷彿とした。

中でも、虫送りの行事、雨乞いの行事については、特に興味をそそ

られたので、ここに記す。

虫送りの行事としては、昔杉の葉で御輿状の物を作り、かついで稲田まで行ったという言い伝えは関根氏(87才)の記憶にはなく、覚えておられるのは、虫封じの護符として皇太神宮よりお札をいただき、竹の先を割って、そのお札をはさみ、「稲虫送れ、稲虫送れ」と囃しながら田まで行き、田圃へその竹を刺しておくそうだ。

雨乞いの行事は、年中行事としてではなく日照り続きの天候のときの、村の行事として行われたそうだ。

農具や、日常の台所用具を材料に、竜の形を作り、海岸までをねり歩く。

大きな箕を二つ合わせて口を作り、その上に小ぶりの笊を伏せて目とし、更に竹で角を作り、ペンキで彩色して頭部は完成。胴部は、箕の端から縄を両側に結び、その上に六間位の長さに菰を乗せてできあがる。作製する者は、村の決まった人物が当たったという。

雨乞いの行事も、虫送りの行事と同様、皇太神宮が主体で、完成された竜は、神社でお祓いを受け、胴体の菰の下に人が入り、海へとねり歩く。その前後には、町内の人達が、木車に乗せた太鼓を賑やかに叩きながら連なる。竜の歩く道の両側では、人々が、雨を乞うて菰に向かって水をかける。菰が水をかぶってだんだん重みを増し、海岸に行き着くまでにふらふらになり、まさに蛇行そのものだったそうだ。関根氏によるとこの行事は大正八年が最後だったらしい。

一説によると御神体の竜は船に乗せられて沖へ漕ぎだされたというが、関根氏は、そのような事実には遇れなかったと言われた。

十月十九日、小春日和の一日、再び関根氏宅を訪問。その広い前庭で竜作りに挑戦。榛葉さん、稲葉さん、有田さん、佐藤さん、川島の五名。途中、川上さんが顔を出される。

関根佐一郎氏(85才)、同期で友人でおられる山口仙太郎氏(84才)、お二人の小学生の頃を思いだされてのご指導の下、竜作りを始める。

材料はすべて榛葉さんが準備してくださる。

大きな箕を二つ合わせて口を作り、その上に小さな笊をつけて止め、笊をアルミ箔で覆い、頂上に黒紙を貼って目を作る。口元に鋸状に切った銀紙の歯をつけ、口の中に赤塗の波団扇を入れて舌とし、笹の角をつけ、細竹を箕の先につけて支えにし、その上に菰をかぶせて終了。製作途中、農協の方が見え、四方八方から写真を撮っていかれた。

できあがった竜は、恐ろしいというより、ちょつぱり雨蛙に似たユーモラスな竜となった。雨乞いの竜、公民館祭の間だけは、効力を発せませんように！

野菜、果実に関してのお話の中で、甘薯について、私には初耳だったことは、村には、「薯啓」「薯国」などの薯問屋があって、主に関西方面に出荷していたこと。三島の薯と競争で関西市場へ出したこと。鵜沼の薯は、斜めに切って胡麻をまぶして焼く関西の焼きいもに好適であったことをお聞きしたことだ。

帰り際に、関根氏より、「^{うだつ}税が上らぬ」の意味を教えていただく。今まで梁の上に立てて、棟木を支える短い柱、^{うだつ}税のように、頭を押さえられて立身ができない様子とばかり認識していたが、関根氏宅の屋根の上に建てられた小型の屋根を指されて「あれが卯建だ」と言われた。江戸時代から卯建は富裕の家でなければ上げられなかった。なるほど、卯建を上げることは、立身出世をし、産を成すことだと理解した。

二回に亘る関根氏宅訪問、その度ごとに歓待をお受けし、心よりお礼を申し上げます。

湘南中学校（旧制）から高校へ

吉田 興一

昭和18年、私が大学予科に合格して、その入学式での自己紹介のとき、いまだに深く印象に残っているのは、「私は天下に名門の誉れ高き湘南中学の出身である」と誇らしげに高言した同室の友人のことである。私は北九州小倉中学の出身で、当時神奈川県いや東京の進学状況のことなど何もしらなかった。戦時中なので、むしろシンガポールが昭南市と称したことのほうが記憶に新しかった。

時は変わって平成の時代、半世紀前の記憶はさておき、「鵠沼を語る会」に在籍するようになって、鵠沼は、湘南高校の地元なので、郷土の名門校にすぎなくてはできないと思案していたやさき、私の目の前に、「わが母校、わが友」（毎日新聞横浜支局編）という単行本を、会員の野口由久江さんからお借りすることが出来た。その中で”湘南高校の部”を執筆されたのが、夫君の野口 元氏である。……以下同誌の抜粋を掲載させていただき、湘南高校の歴史にふれることにする。

なお、著者は不幸にも平成⁵年2月に逝去。心からご冥福を祈る。

『初代校長・赤木愛太郎』

その昔、学校長は一般教員の生殺与奪を握っていた。人事面ばかりでなく、給料の額まで校長の胸三寸で決められるといったあんばい。大正10年4月に開校した湘南の初代校長、赤木愛太郎は、こんな”校長の権限”をバックに学校づくりを進めた。それも、「この学校を日本一にする」と大ボラを吹きながら。

注・当時、県内にはすでに5校の県立中学があり、一中（現希望ヶ丘高）は早くも二十五年の伝統を誇っていた。

新潟県長岡女子師範校長から転任してきた赤木は「知育、徳育、体育の三育一体」を教育目標に掲げ、それを基準に”デキル”とにらんだ教師には給料の上積みをはかるといった作戦もとった。さらに「有能な人を」と自分で招へいにかけてまわった。このほか外人講師も招いたのだから、麦畑の中の小高い丘の上の木造校舎一棟と百二十五人の一年生でスタートした中学校には、ぜいたくとさえいえる。赤木は昭和三十一年八十三歳で病没した。その胸像が校友会である「湘友会」を中心として二十九年に建立され、校門わきから、この学校の移りかわりを見ている。第一回生の入試は、大正十年三月二十六・二十七日、藤沢小学校の校舎を借り、試験監督も小学校の先生に頼んで行われた。試験科目は国語（読み方、書取り、つづり方、書き方）算数、歴史、

地理、理科それに体格、口頭試問となっていた。百二十人の定員に対して応募者は二百三十五人、合格者は百二十六人だった。藤沢市内で剣道場をひらいている伊沢普作（大13）は「私らは大正九年に小学校を卒業した。藤沢に中学校ができるということで、一年間高等小学校に通い、湘南の開校を待って入学したんだが、それまでは、平塚農学校などへ進んだ人が多かったですよ。まさに、待ちに待っての入学だった」と、言っている旧制中学時代は県下全域が学区域であったが、通学距離などから東は鎌倉・逗子方面、西は平塚あたりまでと湘南地方に住む生徒が殆どだった。鎌倉方面から来る生徒は都会的のムードをもつものが多く、藤沢・平塚方面の生徒は剛健派のイメージが強かった。これが校内でミックスされ、それぞれの”良さ”をお互いに吸収し合っていた。同じ1回生の伊原隆は「藤沢駅から通じている麦畑に囲まれた砂の道をポコポコ歩いて通いました。学校の近くの草むらには、マツムシなんかがいてね、チンチロ、チンチロと鳴くんだ。たっぷり自然に親しみました。同級生の山下（立軌会の画家、山下大五郎）とは畑の中で、コエタゴをもってたたきあったり。そのときは先生にドナられて『井戸で体を洗ってこい』とね。それから立たされた」「勉強では伊原や天野武一（最高裁判事）などにはかなわないと思ったから、剣道一本ヤリでいった。校長のいう日本一に剣道でなつてやれ、と考えたわけだ。だから、英語の授業などはノートを取らず、腕組みをしたまま教壇をにらみつけていた。学校には道場がなく、校舎の裏庭で、シャツとスボンといった珍妙な恰好で木刀を持ち、かけ声だけは勇ましく基本の練習をした」（伊沢）第一回生は四年で上級学校へ進学した七人を含めて八十六人。木造二階建て、校舎の裏はずれにあった寄宿舎は、昭和四十一年に建て替えられるまで、多目的に利用された。大正十四年当時、学校設備の一つとして寄宿舎を備えなければならなかった。県は八十人定員のしっかりしたものを建てる予定だったが、生徒の通学区域などから考えると「そんな大きなものにするより、寄宿舎にかけるカネで理科教室を造った方がまし」という赤木の判断で小じんまりしたものにした。家が東京に引っ越したので、五年生の二学期から寄宿舎入りした岩淵二郎（昭2）は「一階にいた舎監の先生が徹夜で勉強しているんだ。中学校の先生で、あんなに勉強しなければならないなんて、よほどデキの悪いのかなぁと思ったりしてね」とその生活をふりかえっている。この舎監は二十八年から三十六年まで校長をした松川昇太郎。実は高等教員試験のため勉強をしていたのだ。英語の教科書の著者としてご存じの方も多いただろう。岩淵は”寮長”といった存在で大部屋が二間しかない寄宿舎二階に下級生を並ばせ、勉強させるなどニラミをきかせていた。岩淵によると、寄宿舎の中に、田中英光もいた。田中は小説「オリンポスの果実」を書き、桜桃忌に太宰

治の墓前でアドルフ自殺をした作家。早大時代は、ボート選手で、昭和七年のロサンゼルスオリンピックに出場している。赤木の見通し通り、寄宿舍を利用する生徒は十人くらいしかなく、昭和五年三月で廃止され、二階は図書室、一階は理科工作室に造りかえられた。そして、進学準備をする卒業生、つまり浪人のための補習科の教室にもなった。この補習科は途中二年間中止されたが、十七年まで続けられた。校内に予備校があったわけだが、先生は五年間教わった教師たちだったので、中学生活が延長したような気分で受験勉強に取り組めたらしい。政治評論家の戸川猪佐武（S6）は四十周年誌の座談会で「おやじが官立を受けろって、ほかは受けさせない。見事にすべった。当時補習科には四十人くらいいたかな。うれしかったのは、中学時代と違ってあまりおこられなかったこと。寄宿舍の裏の方に松林があって休み時間はそこでたむろする。校庭の方は日陰の身だから遠慮して……。六年生とっていたかな」と話している。そうこうするうちに、戦争が激しくなり、終戦。こんどは家を失った蟹江忠彦や、望月英雄といった教師たちが住み込んだ。住宅事情がいくらか好転すると運動部生徒の合宿所。汗くさいにおいのするトレーニングシャツの洗たくをなれぬ手付つきでしたり、先輩にしごかれて、ヘトヘトになって布団に横たわった思い出をもつスポーツマンは多いだろう。四十年八月、この木造の建物はとりこわされ、鉄筋コンクリート二階建ての生徒会館「清明会館」に生まれ変わった。「清明」は校歌にある「清明ここに学ぶ」にちなんだものである。

ピーピー ドンドン 過去分詞

「ピーピー（P・P）ドンドン過去分詞、分詞は動詞で形容詞、ケツから前を修飾する」「我死なむ君も死ななむ二人とも死になむ世なむはかなきとなむ」「公地公民国郡里、戸籍を作って班田収受、租庸調」・・・湘南の教室で生徒たちが、そろって唱えた”呪文”の代表作である。はじめのは蟹江忠彦の英語の授業、次は村田邦夫の国語（古文）最後は小山文雄の日本史。いずれも過去分詞の働き、「なむ」の用法、大化の改新の詔が頭にこびりつくように工夫されている。三人とも現在は湘南の教壇から離れているが、口をそろえるように「生徒に基礎をたたきこむためにとった教育方法だ」と、受験教育を否定した。だが、戦前の歴史教育でだれしもがやり、やらされた「ジム、スイゼイ・・・・」と一脈通じるところもあるのではなからうか。

手掘りのプール

夏の暑い日ざしのなか、校内の北西すみにある砂山で、エッチラ、オッチラ穴掘りが始まった。前項の職員、生徒が総出である昭和五年七月の夏休み直前のこと。学校プール建設作業だ。そのころ、学校でプールを持っているのは横浜二中（現翠嵐高校

）くらいのもの。湘南は、片瀬海岸まで出かけて水泳練習をした。そこで、昭和三年の御大典記念の事業として、プール建設がとりあげられた。不況時代。おいそれと着工するわけにはいかず、職員、生徒七百人が毎月十銭ずつきょ金し、十年間で八千四百円を集める計画を立てた。そして篤志家の寄付などもあって、この年には着工の見通しが生まれた。しかし、校内の力で作業を進めるというきびしい条件がついた。全校作業は七月二十一日から五日間、その後の夏休みは、有志による作業ということだったが、ほとんどの生徒が学校にやってきた。創立十周年誌には「5日間の全校作業の参加生徒は延べ三千四十九人。救護班の調査によれば、手のマメ百九十六、切傷二十三、擦傷二十五、気分悪かりし者わずか四」という記録がある。八月いっぱいコンクリート作業終了、九月一日給水試験。このあとタイル張り、上塗りは本職に引き継がれ、十一月二十七日に完了した。この作業に加わった卒業生たちは、だれしもモッコかつぎやセメント張りのことを楽しげに話す。「胸にはいまだそのときの名譽の負傷が残っていますよ。足場を組んだ針金にひっかっちゃってね」と宮田工業取締役、宮田輝彦（昭9）「くわしいことは忘れちゃったが、作業のあとにスイカがよく出たことは覚えている。スイカにひかれてモッコかつぎをしたようなものだな」というのは法大教授松岡磐木（昭10）。教職員もなつかしむ。美術教師だった塚本茂は「暑くてたまらねえから、おれなんかフンドシひとつになっちゃったね。インキンもできたよ。一つの目的に先生と生徒が一緒になって働く気分はそう快だった」といっていた。それから生まれた水泳部は「元日に江ノ島で泳ぎ、当時の名物にもなった」という。 当時は、生徒の校外での行動にはきびしく目をつけられていたわけで、旧制中学の帽子には白線一本が入れられ、どこからでもすぐ目立つようになっていた。ソバ屋への立寄りなども、きびしく禁じられ、赤木が生徒にたれた訓示の代表作に「心せよ。校外飲食、カンニング、グレと盗みはなおさらのこと」というのがある。学校の帰りにソバ屋に寄ったのがバレて、親が呼出しを受けたり、カンニングでは退学処分まで出たが、生徒たちはこのゴロのよい訓示の語り出しの部分の「心せよ」を「試みよ」といいかえてケラケラ笑い合った。また、グレは「G・R・E」でグロ、レッド、エロの略。また、通学路も決められ、遊行通りは藤中（現藤嶺学園藤沢高校）、銀座通りは女学校（現県立藤沢高校）、そして湘南は日本精工寄りの中学通りを藤沢駅からそれぞれ歩いた。ズボンのポケットもミシンをかけて使えないようにされた。手をつ突込む姿がみつともないという理由からだった。

兵学校希望者で「軍人組」

「ゲートルを巻いての戦時訓練が始まっていましたよ。私がいたころは」という福田恆存は、当時の戦時色が強まった昭和十五年に英語の講師として着任した。当時の校内情勢をかいつまんでみると、十四年には農家への勤労奉仕が始められ、開校当時から続いていた修学旅行は、十五年三月の関西旅行を最後に中止された。また、手りゅう弾投げなどを種目に含んだ体力検定制度が実施され、クラスの呼び方も十六年に、一A、二B、三Cから11組（一年一組）22組（二年二組）・・・と呼ぶようになった。この11、12方式はいまも使われている。

A. B. C. 方式をやめたのは、英語を”敵性語”としての戦時体制だったのでむろんのことだった。だが、その敵性語である英語の教育は、こんな情勢のなかでも力を落とさずに続けられた。一クラス五十人を半分に分けての少数教育であり、教師は教室に入ると英語以外はしゃべらないで授業をするダイレクトメソッドがとられていた

福田は「生徒のグッドモーニングサーで始まる授業にはとまどった。英語を目で習ったことしかない私には、授業を始めるときのマクラことばが出ないので弱った」といっている。そして松川昇太郎、直井要（元江南、湘南両校長）加藤壽雄（幾徳工専）らの授業に舌をまいていた。

このころになると、陸士、海兵への進学者も増え、四年のクラス編成では、これらの進学希望者だけで一学級を作った。41組51組がこれにあたり、生徒たちはこれを「軍人組」と呼んだ。彼らが卒業した年は、大学生の学徒出陣が始まり、全国的に戦争の嵐か教育を包み込んだときだった。神宮外苑の雨中行進で行われた学徒出陣式で答辞を読んだ江橋慎四郎（S13・東大教授）は「僕の在学時代は、まだ戦争のかげりはなかった。それより純真無垢で、学校生活をエンジョイした」といっている。その翌年の軍関係学校進学者は八十二人と卒業生百九十六人の四割にもなっている。こんな風潮のなかでの生活を菊村到（S18・作家）は四十周年記念誌のなかで「月曜日の放課後には、全校教練というものがあって、全校生徒が閱兵分列にかりだされた。ぼくは、あれがいやでたまらなかった。（中略）ただ、不思議なのは、この学校は、軍国主義的であったにもかかわらず、卒業生には、自由主義的な人間が多いということだ中学校の教育というものは、そういうものであるのかもしれない」と書いている。

校技サッカー

「この間も、家の近くの空き地でサッカーやっていた子供たちのボールがころがってきたのでけりかえしてやったら、”おじさんうめえなー”といわれたよ」と松川昇太郎元校長が自慢げにいう。サッカーは湘南の”校技”として全職員、生徒にしみつい

たスポーツだ。昼休みに三段のスタンドができて校庭の土手に向かってボールをけりあげたり、一つのゴールポストを何組もが同時使用したり、五十人近いクラス全員が一チームとなつての”押しあいへしあいゲーム”は同校の名物でもある。春原淳三（県教育相談所）は「着任のあいさつをすませたとたん、先任教师が汚れたスポーツシャツをもつてきて”さあ、やろう”。校庭に出るとフォワードをやらされた、さんざん走らされた。教員同士も担任別の対抗戦など、暇をみつけてはサッカーをやった」と昭和九年から三十七年までの湘南教師時代を語っている。こんなムードだから、昭和二十一年の全国優勝の戦績を含めて終戦直後まで県内のトップクラスの実力を常にたくわえていた。その後サッカー部は昭和40年に関東大会優勝を飾っている。

真紅の大優勝旗

戦後の混乱した情勢のなかで、校内をパッと明るくしたのは、運動部の活躍であった。二十二年十一月八日の湘中新聞の創刊号はスポーツ特集を組んでいる。ワラ半紙にガリ刷りだが、この時期にはほとんどの部が県大会で優勝し、インタハイや国体に出場している。わけても二十一年のサッカー部に続き、二十四年に全国優勝した野球部の活躍はそのハイライトであった。

・・・その前々年及び前年は福岡県小倉中学校が連続優勝。

湘南の野球部は戦後生まれ

運動場のかなりのスペースを限られた人数で使うのは好ましくないという赤木校長の考えで戦前は野球が禁止されていた。それが、二十一年の夏の大会を前に部活動を認められた。そのいきさつとして「強豪がひしめいている神奈川では、戦前は勝てる見込みがなかったが、終戦前の工場動員などで、すべての学校が同じスタートラインについた。今こそ野球をやろう」と赤木が決断したというエピソードが伝えられている。”無欲の勝利”といわれた甲子園優勝のときのナインは、田中孝一（S25）、平井勤（S27）バッテリー、岡本英二（S25）、古家了（S25）、脇村春夫（S26）、宝性一成（S25）が内野、佐々木信也（S27）、根本功（S26）、原田靖男（S27）が外野を守った。監督は佐々木久夫（道也、信也、敬也三兄弟の父）であった。

時計台の下に立たされて

数学教師だった春原淳三（県教育相談所）は、学校で生徒に配られた文書や旧制中学時代の帽章など湘南の資料をこまめに集め、保管している。湘南の資料についてみれば、「春原博物館」ともいわれている。そのなかに三十三年の火災で焼けた職員室の時計の振子がある。この時計の下には、イタズラ坊主が立たされた。職員室の中だから、教師が「おまえ、なにしたんだ」とかわるがわる”タタサレ坊主”に聞く。そ

れにいちいち何度も繰り返し答えなければならないところが、生徒にとっては実につらいオシオキであった。昭和十年ごろから始まり、終戦前後に消滅したようだ。

男女同権

その年の入学者選考会議は熱気がこもっていた。教師たちが集まっている会議室には、ブタ汁のタキ出しがされ、徹夜で議論が続いた。朝から始めた会議が翌日の昼前まで、三十時間もかけてやっと結論が出た。そして五十九人の女生徒を含む四百三十人の入学者が決まった。これが湘南の男女共学のスタートであり、旧制中学の末っ子だった二十七年卒組が三年間まちのぞんだ下級生の誕生だった。昭和二十五年のことである。女生徒として第一期生である渡辺よし子（S28）は「なにか先生たちが女子に対してピリピリ神経を使っていたようだ」と当時のふん囲気を話している。出席簿の名簿をどう並べようかとか、成績が悪かった場合、男子並みに扱ってよいだろうかといういろいろ心配したようだ。女子便所や更衣室などの設備とともに”初体験”の教師たちにとっては大問題だった。

湘南生とは

大正十五年（昭和元年）に卒業した第一回生以来、昭和の年数に合わせた卒業回数を重ねている湘南は、卒業生総数はすでに二万人を超えた。このなかには、湘友会名簿に三十二人しかない二十一年組のような年代もある。学制の関係で二十年に五年生と四年生が同時に卒業したためだ。そのうちの一人、石井道喜は「本来は二十年の卒業だが、在学中に軍隊に行ったので一年遅れた。卒業式はなく、下級生の終業式と一緒に免状をもらった」といっている。また、昭和十四年からは、私立の各種学校のかたちで湘陽中学が併設された。入学希望者の増加に対応した定員増対策ともいえ、赤木が創設者となり、校内に一学級をつくり、湘南の教師たちが授業を進めた。最初の学年は浅沼早苗（S4・学習院大）が担任となり「湘南の入試に失敗した」という生徒たちのコンプレックス排除に努力した。そして、サッカーの県大会では湘陽が湘南に勝つまでにレベルアップ、上級学校進学も、当時の特別制度である四年からの進学者は湘南に編入して実現させた。二十年三月には全員を編入して廃校した。これにより、十九年、二十年と二回の湘陽卒業生は湘南のそれにあわせた。新制高校への切替えとともに帽子の白線が消え、エリ章（バッジ）が登場した。帽子そのものも四十五年ころからかぶらなくてもよくなった。バッジは、学年ごとに赤、緑、藍の三色に色分けされている。制作時には、初代校長の赤木愛太郎の名にちなんで赤黄藍（アカギアイ）とする予定だったが、物資不足のせいで黄色の色合いが良く出ず、緑にとりかえられたという。

また、藤原義昭（S 2 5）の父兄として二十二年に運動部の活動費工面のための音楽会を開いた藤原義江、三十三年の校舎火災直後に復興資金募集のための公演をしたダークダックスの遠山一（S 2 3・本名金井政幸）や松山バレエ団の石田穂生（同）四十年記念に祝歌を寄せたアララギ主宰者の五味保義（元教師）、五十年誌作成に大きな力のあった平田孝次（元教頭）、小出一郎（英進予備校）らにみられるように、湘南の歩みは学校をとりまく幅広い人材に支えられているともいえる。だが、その多くは、ほめられたり、特筆大書されようとする気持は毛頭もたない。まわりがさわりでも当人は「やるだけやっただけのこと」とすましている。そんなはにかみ家が多いようだ。

これからの湘南は、一学年十二学級というマンモス高校になろうとしている。県の高校生急増対策の一環であるが、創立時の三学級からみれば四倍にふくれあがる。そうなっても、やはりはにかみ屋が続出するのだろうか。

注・この書は昭和51年3月1日に発行のものである。

おわり

「鵠沼」第70号
平成6年3月8日発行

鵠生園日記（続）
関根佐一郎氏宅を訪ねて
湘南中学（旧制）から高校へ

ご注意：本紙（機関紙）の文
章を引用される方は、必ず
出典を明記して下さい。

編集・発行 鵠沼を語る会

鵠 沼 公 民 館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34